

記憶が出現するとき ——フロイトの思考と〈現実〉——

中 村 靖 子

はじめに

固有の空間を開くこと、進入すること、抵抗に逆らって道を開通すること、**通路を作り出す**ため断絶し突入すること (rupta, via rupta)、ある形式を暴力的に記入すること、自然ないし素材のなかに差異の痕跡を残すこと、こうしたことはすべて、エクリチュールと対比することによって初めて、そのようなものとして思考されるのである。[Derrida (1966): 317/432]

「心理学草案」(1895、以下、「草案」と略記)¹は、「記憶」を科学的に説明する試みである [Freud (1950 [1895]): 391/8–9]。ところで神経系の構築から記憶を説明する際の困難は、神経系が、一方では、刺激を受けとって興奮するが、他方では、新たな刺激を受けとるために、「空」の状態にもなる、という点である [Freud (1950 [1895]): 390/8]。神経系に求められるこの二つの機能を説明するために、当時、「知覚細胞」と「記憶細胞」という二種類の神経細胞が想定されていた。フロイトの『失語症の理解のために』(1891) (以下、『失語論』と略記) は、こうした捉え方に対する応答であり、その数年後に構想された「草案」は、この失語症研究を出発点とし、のちの『夢解釈』(1900) や『快原理の彼岸』(1920) へと展開する心的装置の理論的基盤の構築過程を証言したものとなっている²。なかでも、上記二つの機能の説明は記憶装置を考察する際の課題であり続け、デリダによれば、その達成は「マジック・メモに関する覚え書き」(1925) まで待たなくてはならなかった³。

1 「心理学草案」は、フロイトの生前には公開されることはなかった。これは、1887年から1904年までのあいだにフロイトがヴィルヘルム・フリースに送った膨大な書簡や覚え書きと共に発見され、1950年『精神分析の揺籃期より』というタイトルで出版された。その後、1985年に完全版が英語で出版され、ドイツ語版が1986年に出版された。2001年に出版された邦訳はドイツ語版を底本としている。本論ではドイツ語版と邦訳を参照した。

2 1959–60年に行われたラカンのセミナーは、「草案」におけるフロイトの「物 das Ding」概念を軸としており、これは『精神分析の倫理』と題して1986年に出版された。邦訳は2002年。「草案」を論じた物としては他にカール・H・プリブラムとメルトン・M・ギルの『フロイト草稿の再評価 現代認知理論と神経心理学への序文』(1976) などがある。

3 この論考は、精神分析研究所でなされた講演がもとになっており、「フロイトとエクリチュールの舞台」と題されて、デリダ『エクリチュールと差異』(1967) に収録され出版された。

「自然科学的心理学」を目ざすこの「草案」は、物理学からの「慣性の原理」と、生物学からの「ニューロン説」を二つの柱とし、「物理学的観念の上にはしっかりと基礎づけられ、あらゆる事象が測定可能であるという理想」を掲げた試みだった。それは、「心的諸過程を、呈示可能な物質的諸部分の量的に規定された状態」として表すことを目指すものだった。以来、120有余年、心理学は認知神経科学と限りなく接近する一方で、「心理学の哲学」という試みも生まれている。これらの源流に、フロイトの自然科学的心理学とメタサイコロジー⁴がある。本論は、近年認知神経科学の分野から提起された幾つかの理論を参照しつつ、フロイトの構築した心的装置の射程を測ろうとするものである。

I フロイトの「心理学草案」における神経系の構造

1 「慣性の原理」/「エネルギー保存の原理」

「草案」が第一に依拠するのが、「慣性の原理 *das Prinzip der Trägheit*」⁵である⁶。『ヒステリー研究』(1895)の「理論的部分」では、休止状態にある脳について述べられている。脳は、いつでも瞬時に起動できるように一定量のエネルギーを待機させている。これらのエネルギーが使用されないままの状態が続けば、神経細胞にとっては負荷となり、不快を生じさせる。逆に、なんらかの機能を発揮するためにそれが消費されるならば、負荷は除去され、不快は消失する。したがって、エネルギーの消費は不快を消失させ、快を生む。快と不快のこうした定義は、「有機体には「脳内興奮を恒常的に一定に保とうとする傾向」(フロイト)があるという事実」[Freud & Breuer (1895): 255-6/249]と合致する⁷。

「草案」はこの原理を、外的世界からの刺激を受容して神経細胞が興奮する「量」によって説明する。その際、神経興奮はQ〔量: Quantität〕、という記号で表され、「神経系内部のエネルギー」、「ニューロン間を流れる量」は、それとは区別して、Q_nと表記される⁸。

4 フロイトは、心理学の理論化を進め、1915年以降執筆した諸論考を、『メタサイコロジー序説』という名で一冊の本にまとめるつもりでいた。

5 原文でイタリックになっている個所については傍点を付してある。

6 これは、エネルギー保存の法則に相当する。フロイトの師ブリュッケは、ヨハネス・ミュラーの弟子たちの一人であり、そのサークルでは1847年にヘルムホルツがエネルギー保存の原理に関する講演を行っていた。(『フロイト フリースへの手紙 1887-1904』に収録されたエルンスト・クリスによる「一九五〇年の初版への序論」より [Kris (1950): 538/517].)

7 「理論部分」は共著者ヨーゼフ・プロイアー執筆とされているが、この個所はフロイトからの引用となっている。その原典についてエルンスト・クリスは、1892年のフロイトの暫定報告のための草稿を挙げ、以下の個所を参照させている。「神経系は、その機能状況における、我々が〈興奮量〉と呼ぶことのできるものを不変に保とうと努めており、感知されうるあらゆる興奮の増大を連想的に処理するか対応する運動反応を通じて排出することによって、この健康の条件を貫徹する」[Kris (1950): 537/516-7].

8 『心理学草案』編者注(4) (フロイト全集第3巻364頁)

慣性の原理はまず、【神経の】構築が運動性と感覚性に二分していることを、 $Q\eta$ [キューエータ] の受容を $Q\eta$ の放出によって帳消しにするための装置として説明する⁹。[Freud (1895): 388/6]

外界からの刺激を受容し(感覚性)、それにより生じた興奮の量 $Q\eta$ を、筋組織 Muskelmaschinen と結合して放出する(運動性)。興奮量の大きさは、刺激の強さに対応する。こうして神経系は刺激のない状態に維持される。こうした放散が、神経系の一次機能である。

2 「接触障壁理論」

慣性の原理に続いて、第二の柱となるのは、ニューロン理論である¹⁰。「細胞突起で受容し、軸索で受け渡すという仕方で、一定の伝導方向」[Freud (1895): 390/7] を予め形作られていることから、ニューロンの機能は一種の「流れ」を想定させる [Freud (1895): 391/8]。一方で、二次機能の発達のためには、エネルギーの余剰、ないしは蓄積が必要となるが、蓄積は、放散とは真逆の作用である。それゆえ、蓄積が可能となるためには、放散を阻止する要因が必要となる。そのような真逆の作用が生じるとしたら、それは同一のもの内部ではなく、相異なる二つのものが接触する部分でこそ起こるだろう。したがって接触部分は「接触障壁 *Kontaktschranken*」として機能すると想定される [Freud (1895): 391/8]。

ニューロンの仕事は刺激を受容し、記憶することにある。受けとった刺激を記憶しつつ、新たな刺激を受けとるために「空」の状態でなければならない。この相矛盾する二つの機能を説明するために当時受け入れられていたのが、「記憶細胞」と「知覚細胞」という考え方である。知覚を請け負う細胞は、刺激を受け取るのみで何も保存しない。記憶する細胞は、アルバムのよう記憶を貯蔵する。こうした記憶理解に対し、フロイトは以下のように反論した。

さて、単純な表象、もしくは、単純な表象に代わって反復される表象の生理学的な相関項とは何であろうか？ はっきりしているのはそれが、静態的なものではなく、むしろ出来事のような性質を持った何かであることである。そしてこの出来事は局在化にも堪えうるものである。というのはこの出来事は、大脳皮質のある特定の個所から発し、そこから大脳皮質全体に、或いは特定の経路にそった領域に広がるからである。この出来事が経過し終わったとき、それが触発した大脳皮質の中に、ある機能修正が残遺する。つまり、想起の可能性を残すのである。[Freud (1891): 99-100/70]

⁹ 【 】内以示されるのは全集版の編者による補足、〔 〕内は引用者による補足である。

¹⁰ ただし、「草案」におけるフロイトのニューロンは、いわゆるニューロン理論におけるそれとは同一ではない。

外的世界の刺激は、神経系内部に興奮を惹起し、伝播する。この出来事が経過し終わったとき、ある変化、「機能修正 Modifikation」が神経細胞に残遺する。この痕跡は、直ちに心的な何かを意味するわけではない。そして、心的現象が始まったからといって、生理的現象が直ちに已むわけではない以上、生理学的な現象と心的現象を、原因と結果の関係で捉えることはできない。ただ、「この〔生理学的な現象の〕連鎖の一つ一つの構成部分に、いずれかの瞬間からそれぞれ一つの心的現象が呼応するようになる」[Freud (1891): 98/69] と言っているのみである。

神経細胞を他の物質と区別するのは、通常物質であれば、運動が終息すると以前の状態に戻るが、神経細胞は必ず痕跡を残す、という事実である。その上でフロイトが「知覚細胞」と「記憶細胞」という区分に代えて提示するのは、透過性と非透過性というニューロンの性質である。透過性ニューロンは神経興奮の量 $Q\eta$ をそのまま透過させるが、非透過性ニューロンは $Q\eta$ を容易には透過させないか、もしくは部分的にしか透過させない。興奮が経過し終わったとき、前者は以前の状態に戻り、後者は以前とは違った状態になる。以前とは違うという点に、記憶の可能性が生じる [Freud (1895): 392/9]。

両者がその性質を保持しているのは、 ϕ ニューロン [(透過性)] は末梢とのみ、 ψ ニューロン [(非透過性)] は身体内部とのみ関係を有しているからである。本質の差異は、運命と環境の差異に置き換えられたのである。[Freud (1895): 396/15] [下線強調は引用者による]

ϕ ニューロンと ψ ニューロンはただ、どこに位置し何と結びつくかによってのみ、区別される。それが、二つの神経系を分かち「運命と環境の差異」 eine Schicksals- Milieuvorschiedenheit となる。神経系の最末端には、直接外部と接する感覚器官があり、これら感覚器官から ϕ が受けとる刺激は既にして緩和されたものであるが¹¹、 ϕ はそれを、興奮の大きさ (量) として ψ へと伝導する。

ψ ニューロンが非透過性であるということは、そこに抵抗が生じることを意味する。この抵抗は、放散とは違う仕方で、刺激による影響を緩和する。抵抗によって、微量の興奮は通過できなくなるが、同じ刺激が繰り返されると抵抗は弱まり、刺激が起らなければ抵抗は再び回復する。通過できなかった微量の興奮は障壁に滞留し、同じ刺激の繰り返しによって蓄積し、抵抗に打ち勝つほど十分な量となることもありうる。ここから、刺激がなんらかの作用を引き起こすまでの時間的差 (遅れ) が説明される。さて、 $Q\eta$ が蓄積する場合は幾通りも考えられる。興奮量が大きい場合や、反復によって抵抗が弱まり通過のために僅かな量しか失われな

¹¹ 神経系が外部と接する終末器官は、量 (Q) を軽減する「Q遮蔽体 Q-Schirmen」という意義を持っている [Freud (1895): 398/16]。

かった場合であり、また、通過できなかつた場合にも $Q\eta$ は蓄積する。こうした蓄積によって、二次機能が発達する「余地 Platz」[Freud (1895): 389/6] が生ずる。また、強い刺激は、 ϕ におけるのと同様、いくつものニューロンへと分散して伝導するか、もしくは、長い射程を伝導する。そのとき一緒に賦活されたニューロン間には連合が生じ、次に同じ刺激を受容した際にも、共に賦活する。

このようにして ψ ニューロンは、感覚器官によって、接触障壁によって、外部からの刺激から幾重にも保護されているが、刺激が強すぎる場合には、一度きりの体験が抵抗を突破してしまうこともある。それは「痛み」の経験として、「敵対的な想起像」を残す。以後、この敵対的想起像は、不快を惹起し、それへとつながる経路への備給は制止されるか回避される。これが一次防衛である。

3 一次性という概念

知覚の際には、 ϕ 系と ψ 系がともに働くが、想起と再生の際には ψ のみが働く。 ψ は、感覚器官とは直接の接続を持たず、身体内部とのみ関係を持つ。そして有機体の構成が複雑であればあるほど、「神経系は身体要素自体から aus dem Körperelement selbst 刺激、つまり内因性刺激 endogene Reize を受容する」[Freud (1950 [1895]): 389/6]。 ψ ニューロンにとって、外的世界からの刺激に比べて、身体内部からの刺激を回避することははるかに困難である。のちに、快原理の最も根幹となる〈欲動〉(『快原理の彼岸』1925) は、「草案」では術語としてはほとんど現れない。代わって用いられるのが、「生の困窮 die Not des Lebens」である。

ϕ ニューロン系と ψ ニューロン系との違いが「運命と環境の差異」であるのは、それが、さらなる違いを幾重にも生み出してゆくからである。ニューロン間で興奮が放出される時、通路が開かれる、つまり通道 Bahnungen が起こる。通道は、刺激の頻度や強さによってさまざまに異なる仕方で起こる。フロイトは言う、「記憶は、 ψ ニューロン間の通道における差異によって表現される」[Freud (1895): 393/10]¹²。

12『失語論』でフロイトは「機能修正」についてはもっぱらチャールズ・バスティアンを参照しているが、別の症例を扱う際に、ジェイムズ・ロスの『失語について』(1887)を挙げている。そこではロスは、「チャンネル」「抵抗」「反復」「自動化」「抵抗による力の消費」といったイメージを用いて、意識との相関関係をもつ「新しい機構」の発生について叙述している。「さて、個人や種族の経験においてしばしば反復される活動を調整する神経インパルスは、反復されるたびに尾状の付属部分をもった皮質細胞をますます通過しやすくなる傾向がある。そしてこれらの細胞は、先に見たように、お互いに決定的に連絡しているので、神経インパルスは、さほど多くの抵抗に遭わずにそれらの細胞を通過する。そしてインパルスの通過に抵抗が与えられるのが少なれば少ないほど、その結果起こる活動は意識を伴うことがますます少なくなる。このような活動は自動的と呼ばれることもあれば、脳の反射作用と呼ばれることもある。しかしこのような活動は、実際には無意識的に生じる心理的な活動である。しかし慣れない活動を調整するインパルスは、使われないチャンネルを通過するに違いない。或いは、言い換えると、お互いと決定的な連絡を形成しなかつた皮質の表層近くの円形細胞を通過するに違いない。これらの細胞を通過する際、インパルスは、莫大な抵抗に遭い、発生した力の多くは、望んだ活動を起こすのに消費されず、皮質の円形細胞の中に新しい機構を生み

ここで否応なく、あらゆる変容を潜り抜けて固持されている神経系の本来の努力を考えざるをえない。その努力とは、 $Q\dot{\eta}$ による負荷を免れるか、可能なかぎり減少させようとするものである。[Freud (1895): 393/10-1]

外的世界からの刺激の受容と興奮の惹起、放散（負荷の放出）、興奮の終息という一連の出来事が経過した後、神経細胞には痕跡が残る。それが「変容／機能修正 Modifikationen」である。しかし、いかに変更が加えられようとも、負荷を免れ、負荷を軽減しようとする本来の努力は固持され続け、他方、出来事の痕跡が神経細胞に残遺し、「想起の可能性」となる。『失語論』に言う、「動物としての我々の細胞がこれほど多様な機能修正に最後まで堪え、さらに機能修正相互を区別する」という離れ業をいかにして成し遂げるのか、我々にはもちろん皆目見当もつかない」[Freud (1891): 100/70]（下線強調は引用者による）。出来事が神経系に残した機能修正相互にも「差異」があり、それこそが、記憶を可能にする。

生の困窮に強制されて、神経系は $Q\dot{\eta}$ のストックを創設せざるをえなかった。このために神経系はニューロンを増やす必要があり、それは非透過的でなければならなかった。さて、神経系は通道を創り出すことで、 $Q\dot{\eta}$ による充足、即ち備給を、少なくとも部分的に免れるのである。こうして通道は、〔神経系の〕一次機能に役立つものであることが分かる。[Freud (1895): 393/11]

刺激の大きさに応じて、興奮量を放散するために駆動される経路の数も長さも異なるように、 ψ ニューロン間にはさまざまな形で差異が生まれる [Freud (1895): 394/11]。通道により、 ψ は透過的になり、次回からはその経路が選択されやすくなる。あるいは、同じ刺激に対し、同時に賦活されたニューロン同士は、次に同じ刺激があった際に連合しやすい。その上に、快／不快の指標を導入するならば、欲望の対象（想起像）に向かう経路が選択されやすく、敵対的想起像につながる経路は回避される—— ψ ニューロンが非透過性であることは、こうした制止や回避の機能にも役立つ——。このように、量、頻度（反復）、同時性によって、また、快／不快によっても、経路の選択は左右され、 ψ ニューロン間における通道の差異はますます多様化し拡大する。これら通道の差異（記憶）を判別し経路を選択するのが、二次機能である。『夢解釈』では、 ϕ ニューロンが担う一次機能（興奮の放散）は「一次過程」、一次過程を修正し制止する機能を担う ψ ニューロンが生み出す心的過程は「二次過程」と名付けられる [Freud (1900): 607/405]¹³。このとき、二次性が一次性に比して意味するのは、複雑性でも副次

出すのに消費される。そしてこれが、意識と相関関係がある過程である」[Ross (1887): 102]。この点については拙著『フロイトという症例』を参照。

¹³ 神経系が、外部からの刺激を受容し、内因性の興奮を放出するという二つの機能を初めから持っていたとす

性でもない。これらの言葉が示唆するのは、まずもって「時間的關係」[Freud (1900): 609/406]なのである。

一次過程のみを備えているような心的装置というものは我々の知る限り存在しないので、その限りにおいてそういったものは一つの理論的仮構である。[Freud (1900): 609/406-7]

一次過程は当初より備わっている一方で、二次過程は成長と共に初めて形成されるという意味において、一次過程は、二次過程に先んじている¹⁴。しかし、一次過程のみを備えているような心的装置は存在せず、かつ、二次過程とは既にして痕跡（の差異の判別）とすることにより、「一次性という概念」そのものが抹消されるとデリダは言う。

存在を現前として規定する前に、生を痕跡として思考する必要がある。これこそ、生とは死であると言うことが可能になるための、そして、反復と快感原則の彼岸が起源的なものであり、それらによって踏みにじられるものそれ自体に先天的に備わるものだと言うことが可能になるための唯一の条件である。[Derrida (1966): 302/411]

通道は出来事の痕跡であるという定義と共に、『快原理の彼岸』への道づきは始まっていたのであり、「草案」の段階から死の欲動概念は用意されていた。生は、死をただ遅延させることによって可能になると言うとき、死は、生を破壊する敵対的要因ではなく、生を可能にする条件であり、しかも唯一の条件とされるのである。

るならば、「我々は、 ϕ 、 ψ という二つの系を「 ϕ と ψ の二つの系を発案した *erfunden* のではなく、見出した *vorfunden* のだということになる」[Freud (1895): 395/13]。

¹⁴ 近年の脳機能研究を先導したダマシオは、一次の情動と二次の情動という概念を提示し、これについて以下のように説明する。「節約のために手直しして使い回す特技をもつ自然は、一次の情動と二次の情動を表に出すために、それぞれに独立した機構を用意することはしなかった。自然は単に、一次の情動を伝えるためにすでに用意されている同じチャンネルを使って、二次の情動が表出されるようにしている [Damasio (1994/2005): 139/220-1]。一次の情動と二次の情動は、どこかで明確に区切られるわけではなく、「個の成長と関連して、一次の情動のあとに〈二次の情動〉の機構ができる」のであって、「二次の情動が生じるのは、われわれが感情を経験しはじめ、〈対象や状況の分類〉と〈一次の情動〉との体系的なつながりを形成しはじめるときである」[Damasio (1994/2005): 187/214-5]。同じく動物研究から出発した情動研究者ジョセフ・ルドゥーは、進化によって新たな機能を獲得した後にも、以前から備わっていた機能は破棄されないと述べている。曰く、「情動行動を引き起こす脳システムには進化的履歴がよく保存されている」[LeDoux (1996): 17/21]。

II 内因性の刺激の行方

1 非連続と反復

外的世界を量として受容し、質を生み出す神経系は、いわば量を質へと変換する装置である。では、神経系のどこで、質は生じるのか。質と知覚との結びつきから考えるならば、感覚器官と結びつく ϕ に想定されようが、しかし、 ϕ はまさに感覚器官との結びつきゆえに、 ψ に対して下位の階層と見做される。一方で、上位の ψ は、知覚がないときにも想起と再生を行うとおり、「質を欠いた」心的過程を担う。したがって、第三のニューロン系の想定が要請される。第三の ω ニューロンは、知覚の際には共に作動するが、想起の際には無反応であることによって知覚と再生（想起）を区別するという役割を担うが [Freud (1895): 401/20]、それに加えて、時間的性質を付与される。神経系が経験する最も基本的な時間は、おそらく「周期」という形式をとるだろう [Freud (1895): 402/21]。Q遮蔽体である感覚器官は、篩として、「特定の周期を帯びた一定の過程からだけ刺激を通すように働く」 [Freud (1895): 403/22]。これにより、「心的刺激になるのは周期的でしかないという想定」が導かれる。

〔刺激が〕蓄積するという考えは拒みがたく、その心的作用が間歇的であることから、内因性の刺激が ψ へ向かう伝道路の途上で抵抗にぶつかり、その抵抗は量が増大することによって初めて克服されるという見方しかできない。[Freud (1895): 408-9/27]

外的刺激がそうであったように、体の内側から生じる刺激もまた、 ψ へと向かう途上で様々な抵抗に遭う。刺激が微量である場合、抵抗に屈して ψ には達しないが、この刺激が持続的なものであれば、通過できなかった量が蓄積し、増大し、突破することにもなる。その繰り返しが周期を生む。心的作用が遅れを伴うこと、不連続で周期性を帯びることは、このようにして説明される。そしてその周期は、単調なものとなる。デリダは、周期は単調であるというフロイトの言葉に依拠して、時間的性質を、周期性から非連続性へとシフトさせる。

現在が現在それ自体であるためには、ある間隔が現在を現在でないものから分離するのになければならない。けれども現在を現在として構成するこの間隔は、同時にまた現在を現在それ自体において分裂させるのになければならない。[Derrida (1972): 14/51]¹⁵

反復は、複雑に絡み合う絶え間ない現象に区切りを設け、間隙を作ることによって、初めて可能となる。このような区切りを穿つことをデリダは「間隔化 *espacement*」 [Derrida (1966):

¹⁵ デリダにおける「間隔化」とリズムについては、吉松 (2021) を参照。

297/404] と呼ぶ。それは、後のデリダ自身の言葉によれば、「時間が空間になること」にほかならない¹⁶。しかし、この非連続が、死の欲動を用意したと言えるためには、間隔化の考察だけでは十分ではない。デリダの論考がエピグラムに掲げる言葉、「[留保された備給でないとする、] 通道の本義がそれ以外の何であるかという問いは、未解決のままである」[Freud (1950 [1895]): 394/11] という言葉のとおり、「通道」の成り立ちそのものが、死の欲動と関わってくるのである。

フロイトが提示する神経系の構造では、一次過程に従事する神経系と、二次過程に従事する心的構築物が示された。備蓄されたエネルギーを担うために構築されたこの組織が、「自我」と呼ばれるものである。

自我はこうしてその都度の ψ の備給全体と定義でき、そこには同一に留まる構成部分を、変化する構成部分から区別することができる。[Freud (1895): 416/35]

神経科学的に構築される自我は、「その都度の ψ の備給全体」である。「欲望対象ないしはその想起像」と、「敵対的な想起像」という二つの目標に対し、前者の場合にはそれへと向かう「魅惑」が生じ、後者に対しては反撥や嫌悪が生じる。自我は、このように備給の方向を定め、あるときには備給を促し、あるときには制止するよう働き、それにより、ある想起像が意識という舞台上に上ったり抑圧されたりするということが起こる。非意識的過程から意識の領域に進入する、もしくは意識下に抑圧されるといった表現にはしかし、「場所の変化という観念」がつきまとう。これを避けるためにフロイトが導入するのが、「力動的な表象方法」である。

すなわち、エネルギー備給がある一定の配列に充填されたりそこから引き上げられたりする [daß eine Energiebesetzung auf eine bestimmte Anordnung verlegt oder von ihr zurückgezogen wird]、するとそれに応じて、その心的構築物が一つの審級の支配のもとに入ったり、そこから引き上げられたりするのである。[……] 可動的であると見えるのは、心的構築物そのものではなくて、心的構築物の神経支配 [Innervation] である [……]。[Freud (1900): 414-5/615]

表象や思考、心的構築物といったものは、神経系のどこかに局在されうものではなく、いわばそれらの諸要素間にあるのであり、そこでは抵抗や通道が、「その都度の備給状態」を作り出す。自我は、心的エネルギーの備蓄を担うために導入された心的構築物であったことを思い出そう。自我はエネルギーの備給や引き上げによって生じるその都度の神経支配の状態に相

¹⁶ デリダの別の論考『哲学の余白』(1972)にある言葉。引用は吉松 (2021) による [吉松 (2021): 39]。

関し、ニューロンは無数の組み合わせで連合し、そこここに「審級」をもつ¹⁷。こうした神経支配の活性と不活性相互の入れ替わりを、デリダは、生と死の反復の最も基本的な形態と見る。それは、連続性の否定が死を連想させるからではなく、「備給の過剰も、備給の涸渇も死をもたらす」からであり、それゆえ「生の要素と死の要素が相互に混じり合うこと」が、生の条件となっているがゆえなのである [吉松 (2021): 35]。

近年、脳には860億のニューロンがあり、これらは外的刺激によって初めて起動するのではないことも知られている。外的な触媒を待たずともニューロンは常に相互に刺激し合っており、その相互作用は無作為に生じるのでもない。「内因性脳活動」は、「内因性ネットワーク」とも、「デフォルト・モード活動」とも呼ばれ、共に発火するニューロンの集合によって絶えず組織化されている。内因性ネットワークは、「近年10年間の神経科学における最も重要な発見の一つ」 [Barrett (2017): 58/107] と見做されていることに鑑みれば、神経系の構造をめぐるフロイトの「思弁」が目指した方向は、あながち的外れではなかったかもしれない。同様のことは、情動理解においても言えるだろう。

2 コア・アフェクト

感情 affect は、心理学的構成主義的立場からは、二つの過程によって成立すると主張されている。その一つは、身体内部の知覚である内受容感覚 interoception に基づいて、コア・アフェクト core affect と呼ばれる最も基礎的な情動の状態が形成される過程であり、もう一つは、これら原初的な感情をカテゴリー化する過程である (図1参照)。当初、コア・アフェクトは、快・不快、覚醒・鎮静という二つの次元で表現されると考えられてきたが、近年ではそのように少数の次元に還元できるものではないと主張され、修正されつつある [大平 (2020): 5-6]。

カテゴリー化の過程では、外界からの情報により文脈が評価され、さらに過去の記憶や言語により表象される概念 (concept) の機能によって、コア・アフェクトの解釈がなされる。これにより我々は、主観的な意識を伴う感情、すなわち情動 (emotion) を経験する。つまり我々が経験する感情は、カテゴリー化により脳が能動的に構成する現象だということになる。 [大平 (2020): 6]

フロイトにおいて、体の内側から押し寄せる刺激は、体の組織の複雑化に応じて複雑化し、過去の経験による想起像と照合され、それとの差異によって識別され判別された。こうした神経系の機能は、今日では、内受容感覚とカテゴリー化という二つの過程によって表現される

¹⁷ こうした事態は、ルドゥーが「非特異的／特異的」という言葉で表現した状態に呼応する。与えられた情動刺激に呼応する覚醒システムは本来非特異的であるが、情動刺激の種類に応じて、活性化される領域が異なり、その結果、特異的な効果が生まれる [Ledoux (1996): 288/344]。

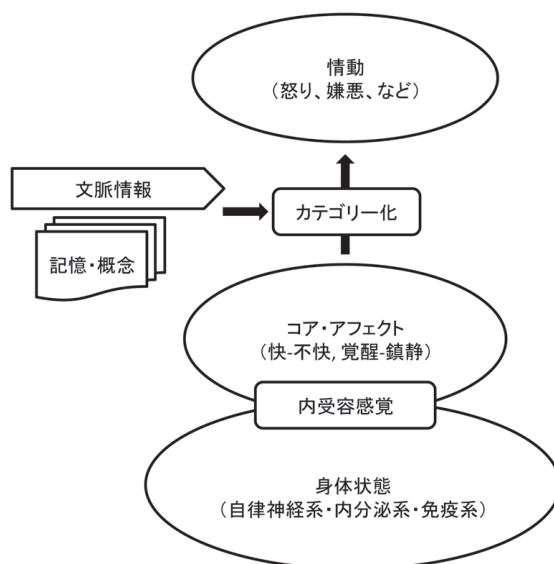


図1 心理学的構成主義から見た感情の構築プロセス（〔大平(2020): 6〕より）

（図1参照）。情動が、二つの過程から構築されると想定することにより、二つの過程の間に生じる齟齬という考えもまた継承される。身体内部から惹起される情動は、往々にして意識という舞台上がることなく、自我にも理解されないまま、ただ身体的振舞いとして現れることを、ヒステリー性の症状は最たる形で示していた。自我にも理解されないというこの特徴は、コア・アフェクトの発生とそのカテゴリー化という二つの過程として捉えることによっても説明される。あるコア・アフェクト状態がどうカテゴリー化されるかは、その人が持っている過去の経験、知識や概念によって大きく変わる。同じ一人の人間に同じコア・アフェクトの状態が再び生じたとしても、文脈理解によって全く異なった感情として経験されることは大いにありうる。このようにして、「意識は、[……]量とニューロンについて何も知らないのだから、心理学の理論は、意識がこうしたことを知らないという事実も説明できなければならない」〔Freud(1895): 400/19〕という課題は、果たされるのである。

コア・アフェクトが、それ自体で重要な機能を担っていることは、既に広く認められつつある。近年では予測的処理（predictive processing）の理論により、非意識的な過程は構造化されたものとして考察されつつある。それは、意識以前という言葉が喚起しがちな未分化状態、概念化や加工を待っている〈原初的な状態〉では全くなく、このようにしても非-意識的過程が〈起源的〉であるということは、「抹消しつつ理解」〔Derrida(1966): 302/412〕されようとしているのである。

3 内的モデルと差異の検出

脳内の860億のニューロンは数百万単位でネットワークを形成するとはいえ、頭蓋内に封じ込められたまま、いかにして世界を把握するのか。過去の経験を指針として「予測する」ことによってである。脳は予測を行い、経験する世界を自ら構築する。ここでいう「予測」とは、「外界からいかなる刺激を入力する必要もなしに、この脳領域のここにあるニューロンは、あの脳領域のあそこにあるニューロンを調節する」ことを意味する [Barrett (2017): 58-9/106-8]。

このような予測を可能にするのは、過去の経験の断片である。これらを素材として脳は、個々の要素を組み合わせ、現在の状況、新しい文脈に応じて結びつけ、可能なかぎり適合させる。どう組み合わせることが適合であるかの判断を行うために、脳は、モデルを生成しさえする。それは、過去の膨大な経験知を分解し、組み替え、適合させる「巨大なシミュレーション」 [Barrett (2017): 62/111-2] なのだ。もちろん、予測が外れることもあり、その際に脳がとる解決方法には、二通りある。すなわち、予測を変更するか、もしくは、感覚入力を変更するか、である [Barrett (2017): 64/115]。これらすべての脳の活動の目的は、身体のエネルギー需要を予測して、無事に生存し続けられるようにすることにある [Barrett (2017): 66/117]。

外的世界と同様、脳にとっては身体もまた外界の一部に過ぎない。したがって脳は、体内の状況を常にモニターし、脳に固有の「内受容ネットワーク」を形成している。内因性ネットワークが外的世界に対して行っているように、内受容ネットワークは身体に関する予測を行い、そのシミュレーションの結果を身体からの感覚入力と比較し、脳内の、世界に内在する「身体モデル」を更新する [Barrett (2017): 67/119]。

何度も経験した事象については内的モデルの精度が高く、未知の事象では内的モデルの精度は低い。予測誤差が同じであっても、予測と感覚信号の精度が同程度であれば主観的な知覚経験は両者の中間的なものになるのに対して、予測の精度が高く感覚信号の精度が低ければ、実際の感覚信号はほとんど無視され、経験される知覚は予測をなぞったようなものになる。[大平 (2020): 6-7]

健常者においては、予測エラーが生じると、感覚入力の変更やモデルの更新が適切になされる。しかしながら、内的モデルが頑健すぎる場合には、感覚信号は正確には受容されず、外界の情報を反映させられないままに、ただ予測に基づいた行動をとることしかできない。逆に、感覚信号の精度が高過ぎる場合には、モデルは構築されず、一つひとつの入力のわずかの違いにも右往左往して、まるで全く別の出来事のように経験される (図2参照)。重要なのは、いずれの場合にも我々が経験するのは感覚刺激そのままではなく、予測モデルとの差分であり、したがって情動経験とは、感覚入力により更新された予測モデルの変化の動きを検出することであるという点である。

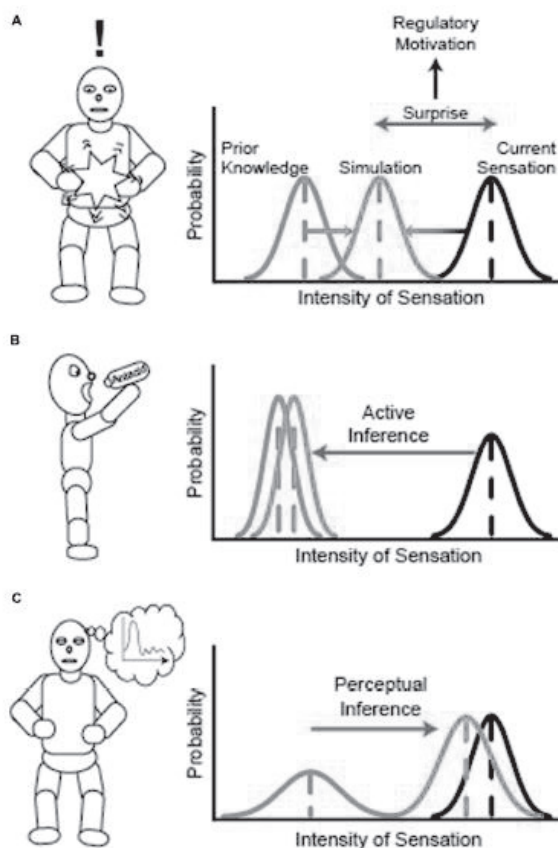


図2 身体の知覚 (内受容感覚) は予測と現実の信号により規定される (Farb, et al. 2015)

各グラフ中、左の分布曲線が内的モデル、右が感覚信号、中央は経験された身体知覚を表し、Aは健常者の場合、Bは内的モデルが頑強すぎる場合、Cは内的モデルが脆弱な場合を表している。健常者では感覚信号に応じて内的モデルが修正された知覚となるが、内的モデルが頑強すぎると、感覚信号にかかわらずほぼ内的モデル通りの知覚となる。逆に、感覚が過敏であると、感覚信号に近い知覚となるが、内的モデルは構築されない。内的モデル (事前分布) と経験知 (事後分布) との差分が予測誤差となる。([大平 (2017): 3] 参照)

III フロイトの思考と〈現実〉

世界がまったく未知であったなら、我々は一步も動きだすことができないだろう。世界は安全であるという基礎的な信頼が持てず、一瞬先には何が起こるか分からない状況では、我々は身動きがとれなくなるだろう。フッサールはあらゆる経験を支える「経験の地平」として「帰納推理」„Induktion“を挙げる [Husserl (1939): 28/24]。我々は初めて見るものであっても、事前の知識や経験に基づき、これを何ものか「として」認識する。このように、現にある状態を出発点とし、ここから類推を重ね現実を理解・解明していく作業をフッサールは予測

Antizipation と呼んだ [Husserl (1939): 28/25]。逆に言うならば我々は、まったく新しい何かを理解したり経験したりすることはできないということだ。その上に、既に見てきたように、神経細胞の働きレベルで〈欲望〉か〈回避〉かという指標が作動して、我々自身にさえ気付かれないままに我々を動かしている。

われわれは、いまや別の区別を導入しなければならない。この区別は、質的なものではなく、局所論的なものであり、また、この区別に特別な価値を与えることになるのだが、同時に、発生論的なものでもある。われわれはいま、多くの審級、領域、区画から構成されている装置と見なすべき心の生活において、本来的に自我と呼ばれるべきひとつの領域を、われわれがエスと名づけるもうひとつの領域から分離することにしよう。〔……〕エスにおけるいっさいの出来事は無意識のままに経過する。〔……〕エスのなかの心的事象にとっては、自我のなかにおける場合とはまったく異なった法則が、その経過と相互作用にとって支配的である。実際のところ、われわれを新たな見解に導き、その見解の正しさを保証しているのは、ここに述べた区別の発見 [die Entdeckung dieser Unterschiede] にほかならない。[Freud (1939): 202-3/121-2]

フロイトは、最後の著作となったモーセ論の中で、精神分析理論の要点をまとめている。一次過程と二次過程という区別は、ここで改めて、エスの領域と自我の領域という区別として提示され、それらの間では全く異なる法則が支配するという。

外的世界が望ましい状態でなく、多くの不快と直面することを強いるばかりであれば、徹底して外的世界と遮断することが望ましい。しかしながらその不快の原因は、命に危険をおよぼすものかも知れない。だからこそ不快であるのかもしれない。そうしたリスクを考えるならば、不快（とその原因）を惹起する刺激を完全に遮断してしまうことは賢明ではない。あるいは、生の困窮に突き動かされているのに、それを解消するような期待された満足が得られない状態が続くとき、満足は、幻想の中では得られない以上、欲望を抑制することも必要となる。しかし、食欲を抑え続ければ、餓死する危険が増すように、生きるためにそれを満たすことが必須の欲望もある。それを解消するために必要とされる状態（欲望状態）と、感覚信号が教えてくれる状態（〈現実〉）とが一致するか否かの判断が必要となり、両者の不一致が、〈思考〉作業への動因となる [Freud (1895): 423/41]。「草案」の前半では、量の蓄積により二次機能のための余地が生じると論じられたが、後半に入ると、量を積極的に蓄積する機能が考察される。それが量の拘束 Bindung であり、それが、現実へと向かう二次過程の確立を可能にする [Freud (1895): 430/47]。

〔……〕 いざ緊張を放出すべきときには、さしあたりこの拘束されたエネルギーの一部だ

けをくだんの記憶像に移動させ、そこから現実を点検してみて、もしこれに一致する対象が現実存在していないと分かれば、放出を一時中断し、そのような対象を現実到来させるべく外界を変化させる道筋を見つけなくてはならない。二次過程とは、こうした一時停止と試行錯誤のプロセスに他ならず、それを司るのが現実原理なのである。[立木(2021): 52]

エネルギーの貯蔵庫を作り、そこから部分的に放出したり、それを一時停止したりして、現実を吟味する。この試行錯誤を、フロイトは「思考」と呼んだ。一次過程が「知覚同一性」を求めると同時に働いたように、二次過程は「思考同一性」を求めて働く。それはつまり、立木によれば、現実の知覚像を記憶像に近づける道筋を、知覚像と記憶像の同一性を能動的に再現する道筋を、予め思考の中で創りあげておくことなのである。そのとき、我々が「現実」として受けとるものは、「もはや外部の「現実」とは似ても似つかないもの」になっている [立木(2021): 54]。頭蓋の中に閉じ込められた数百億のニューロンは、相互にコミュニケーションを取り合っていると言うが、それは、人間による解釈を前提としたものではおよそなく、その限り、テキストとは呼ばれぬものである。この圧倒的に膨大な情報を縮減するものにフロイトは「語表象」という表現を充てたのだが、その対極に位置するのが〈物 Ding(e)〉である。「我々が物 *Dinge* と呼ぶものは判断を免れた残余 *Reste* なのである」 [Freud (1895): 428-9/46]。ここでいう判断とは、内的モデルと感覚信号との差異の検出に相当しよう。差異は双方を照合することを前提とする。つまり感覚信号として受信されることがなければ、そもそも照合自体がかなわない。それは、経験の地平に現れない。惹起したコア・アフェクトによってのみ有ると知られうるが、そのコア・アフェクト自体が既に痕跡でしかない。いかなるカテゴリー化も免れて非意識的の行程の中に滞留し続けるものが、いつか不意に——蓄積して十分な量となったか、周期のリズムに押し出されてか、はたまた、ある神経配列を賦活することを回避した結果の副次的な作用としてか——出現する。それが〈記憶〉と呼ばれるのである。

※本研究は、以下の研究助成による成果の一部です

課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業（領域開拓プログラム）「予測的符号化の原理による心性の創発と共有——認知科学・人文学・情報学の統合的研究——」

科学研究費補助金（基盤(B)）「予測を生み出す推論装置—文学・数学・美術史・科学哲学史・認知科学からの展望」（課題番号19H01201）

科学研究費補助金（基盤(B)）「言説を動かす情動とファシズムの変貌：テキストマイニングによる独伊仏日の資料分析」（課題番号19KT0002）

文献

著者名のあとに初版の出版年を記す。翻訳のあるものについては翻訳を参照し、[原典の頁／翻訳の該当頁]という形で記したが、原語に応じて訳を改めた箇所もある。

- Barrett, L. F. (2017a): *How emotions are made: The secret life of the brain*. New York, NY: Houghton Mifflin Harcourt. (『情動はこうしてつくられる——脳の隠れた働きと構成主義的情動理論』高橋洋訳、紀伊國屋書店、2019年)
- Damasio, Antonio. R. (1994): *Descartes' error: emotion, reason and the human brain*. Reprinted in Quill New York 2000. (『デカルトの誤り——情動、理性、人間の脳』田中光彦訳、ちくま学芸文庫、2010年)
- Derrida, Jacques (1966): Freud et la scène de l'écriture. In: *L'écriture et la différence*, Édition du Seuil 1967, 293-340. (「フロイトとエクリチュールの舞台」谷口博史訳、『エクリチュールと差異〈新訳〉』合田正人・谷口博史訳、法政大学出版局、2013年、399-464頁)
- Freud, Sigmund (1891): *Zur Auffassung der Aphasien. Eine Kritische Studie*. Herausgegeben von Paul Vogel, bearbeitet von Ingeborg Meyer-Palmedo, Einleitung von Wolfgang Leuschner, Frankfurt am Main 1992. (『失語症の理解にむけて』中村靖子訳、『フロイト全集』第1巻、岩波書店、2009年、1-127頁)
- (1895): Entwurf einer Psychologie. In: *Gesammelte Werke, Nachtragsband, Texte aus den Jahren 1885-1938*, Frankfurt am Main (Fischer Taschenbuch Verlag) 1999, S.375-486. (「心理学草案」総田純次訳、『フロイト全集』第3巻、2010年、1-105頁)
- (1900): Traumdeutung. In: a.a.O., 2/3. (『夢解釈II』新宮一成訳、『フロイト全集』第5巻、2011年)
- (1939): Der Mann Moses und die monotheistische Religion. In: a.a.O., 16, S.101-246. (『モーセという男と一神教』渡辺哲夫訳、『フロイト全集』第22巻、岩波書店、2007年、1-173頁)
- (1986): Briefe an Wilhelm Fliess 1887-1904. Ungekürzte Ausgabe herausgegeben von Jeffrey Moussaieff Masson, Deutsche Fassung von Michael Schröter. 2. Auflage 1999. (『フロイト フリースへの手紙 1887-1904』河田晃訳、誠心書房、2001年)
- Husserl, Edmund (1939): *Erfahrung und Urteil. Untersuchungen zur Genealogie der Logik*. Prag 1939. (『経験と判断』長谷川宏訳、河出書房新社、1989 [1975]年)
- Ledoux, Joseph (1996): *The Emotional Brain: The Mysterious Underpinnings of Emotional Life*. (『エモーショナル・ブレイン——情動の脳科学』松本元／川村光毅ほか訳、東京大学出版会、2003年)
- Pribram, Karl H. & Merton M. Gill: *Freud's Project re-assessed*. Hutchinson of London 1976. (『フロイト草稿の再評価——現代認知理論と神経心理学への序文』安野英紀訳、金剛出版、1988年)
- 中村靖子 (2011) 『フロイトという症例』松籟社、2011年。
- 中村靖子 (2020) 「感情を創成する——文学と歴史」、『エモーション・スタディーズ』第5巻第1号、74-84頁。
- 大平英樹 (2017) 「予測的符号化・内受容感覚・感情」、『エモーション・スタディーズ』第3巻第1号、2-12頁。
- 大平英樹 (2020) 「文化と歴史における感情の共構成」、『エモーション・スタディーズ』第5巻第1号、4-15頁。
- Ross, James (1887): *On Aphasia: being a contribution to the subject of the dissolution of speech from cerebral disease*. London.
- 立木康介 (2021) 「〈物〉の秘密——フロイトのリアリティ論からラカンの〈現実解〉へ——」、『思想』No. 1168、8月号、49-77頁。
- 吉松晃 (2021) 『生の力を別の仕方でも思考すること——ジャック・デリダにおける生死の問題』法政大学出版局。

キーワード：予測的処理、フロイト、記憶、内受容感覚、「心理学草案」

Abstract

Wenn die Erinnerung auftaucht:
Freudsches Denken und Realität

Yasuko Nakamura

Im „Entwurf der Psychologie“ (1895) stellt Freud zwei Nervensysteme, ϕ und ψ , auf, um den „Erwerb des Geistigen [etwas]“, d. h. den Mechanismus des psychischen Apparats, zu erklären. Dieser „Entwurf“, der auf eine „naturwissenschaftliche Psychologie“ abzielte, stützte sich auf zwei Säulen, das ›Trägheitsprinzip‹ aus der Physik und die ›neuronalen Theorie‹ aus der Biologie, sowie auf das „Ideal, dass alle Phänomene messbar sind und fest auf physikalischen Vorstellungen beruhen“. Genauer gesagt ging es darum, „mentale Prozesse als quantitativ definierte Zustände von materiellen Teilen darzustellen, die präsentiert werden können“. In den rund 120 Jahren, die seither vergangen sind, hat sich die Psychologie unaufhaltsam den kognitiven Neurowissenschaften angenähert, während sie gleichzeitig versuchte, eine Philosophie der Psychologie zu entwickeln. Sie ist die Nachfolgerin der beiden Strömungen, der naturwissenschaftlichen Psychologie und der Metapsychologie, die auf Freud zurückgehen. Im ersten Fall wird aus psychologisch-konstruktivistischer Sicht argumentiert, dass der Affekt durch zwei Prozesse gebildet wird. Das eine ist der Prozess der Bildung der grundlegendsten emotionalen Zustände, des so genannten Kernaffekts, auf der Grundlage der Interozeption, d. h. der inneren Wahrnehmung des Körpers, und das andere ist der Prozess der Kategorisierung dieser primitiven Emotionen. Wenn wir Freuds „mentales Etwas“ durch Emotion und das ψ -System durch den inneren rezeptiven Sinn ersetzen, dann kann die „Psychologie für die Naturwissenschaft“, die Freud in seinem „Entwurf“ vorsah, im Kontext der zeitgenössischen kognitiven Neurowissenschaften wiederbelebt werden. In diesem Aufsatz wird versucht, den Umfang von Freuds psychischem Apparat zu messen, indem auf einige Theorien Bezug genommen wird, die kürzlich von den kognitiven Neurowissenschaften vorgeschlagen wurden.

Keywords: Predictive coding, Freud, interoception, Entwurf einer Psychologie